

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520528

研究課題名（和文）中国人留学生の言語応用能力と社会適応に関する実証的研究

研究課題名（英文）A study on cultural adaptation and language ability of Chinese students in Japan

研究代表者

楊 立明（YO RITSUMEI）

早稲田大学・国際教養学術院・教授

研究者番号：10267354

研究成果の概要（和文）：

本研究では、中国人留学生を英語、日本語能力によりグループに分け、言語能力と社会適応の諸側面を調査した結果、以下の成果を得た。

- ① 適応意識の多様化
- ② 適応戦略の変化
- ③ 日本語習得と使用意識の相違

また、日本で就職した留学生への面接から、大学生活には適応しても企業での適応には困難を抱えているとわかった。環境要因を加味しつつ、就職後、留学生がどのように適応を図っていくか追跡調査をすることが今後の課題である。

研究成果の概要（英文）：

This research examined language ability and social adaptability of Chinese students who were divided into two groups according to their English and Japanese proficiency, and reached following conclusions:

- (1) diversification of sense of adaptability;
- (2) change of strategy for adaptability;
- (3) difference in proficiency of Japanese and attitude about using it.

We also found out in interviewing students who got job in Japan that they had felt difficulty in getting oriented to working environment even though they had no problem in university. The challenge for the future is to conduct follow-up survey on adaptability of new graduates who just started to work by taking factors related to new working environment into consideration.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2009年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,100,000 | 930,000 | 4,030,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語教育

キーワード：中国人留学生、異文化適応、言語使用能力

1. 研究開始当初の背景

近年、中国の留学事情は大きく変わっている。経済発展に伴い一般家庭の収入が増え、子女を海外留学に送り出す家庭が増えている。そのため、海外留学の大衆化、女子学生の増加、低年齢化現象が進んでいる。一方、日本においても留学生受け入れは転換期を迎えている。学校経営の視点から減少する日本人学生の代わりに中国人留学生を受け入れるために、入学条件に日本語能力を課さない、或いは人材の質的な確保を目的として、留学生に対して英語による入試を実施する大学が増えている。

例えば、今回の調査対象校である関東の私立大学では基本的に英語による授業を行い、留学生定員を学生総数の三分の一とし、日本人学生には一年間の海外留学を義務付けている。このような特殊な教育環境により、留学生を取り巻く環境は次の三点において変化した。①入学時の日本語能力のハードルが低くなり、②英語を共通語とすることで学業

遂行における日本人学生との言語のハンディが緩和され、③留学生の存在は絶対的少数者ではなくなった。

研究代表者および研究分担者中村は、平成17～19年度に科学研究費補助金(基盤研究C「日中双方の留学生における異文化適応に関する通時的研究」)を得て、中国人留学生を対象として調査研究を行った。質問紙調査、インタビュー調査、一部の調査対象者から提供された留学日記から得たデータをもとに、来日動機、生活の実態、異文化適応意識、進路志望などについて調べた。この調査を通して、中国人留学生の言語環境について以下のことが明らかになった。

①授業では留学生への特別な言語的配慮は不必要であり、同一の評価基準に基づいても留学生の成績上位者が多い。②しかしながら、学部外では日本語の運用能力が要求され、留学生の中には教室では英語、アルバイト先では日本語、友人関係では母国語を用いる三重言語生活者が多く見られる。③留学生の中

では在学中に更に欧米へ一年間「再留学」する者も多い。「再留学」により身につけた高い英語力と国際感覚は、彼らの卒業後の進路志望に大きな影響を与えている。しかしながら上記調査・研究では、言語応用能力において主に英語を優位とする中国人留学生を調査対象としており、彼らに見られる傾向を、他の言語応用能力を有する中国人留学生に適応し得るかという課題が残された。

本研究はこの課題を踏まえて、中国人留学生を英語と日本語の応用能力によりグループ区分し、各グループの学校生活、社会生活、日本文化との接触、キャリア形成といった社会適応の諸側面における実態、意識、満足度を調査し、各グループ間の比較を行なう。これらの比較研究を通して中国人留学生の言語応用能力と社会適応度の相関関係を分析し、大学における留学生教育の現状の検証、留学生受け入れに伴う諸問題の解明を目指す。

2. 研究の目的

本研究では、以下の三点を解明するために調査・研究を進めた。

(1) 中国人留学生の適応意識・戦略の解明

これまでの研究は日本社会での適応意識を中心に進められたものが多かったが、本研究では意識のレベルにとどまらず問題解決や適応戦略にも触れ、意識・戦略・現状と問題点から実態を明らかにする。

(2) 言語使用能力と適応実態との関係

(1)に対して、言語（使用能力、学習意識など）がどのような関わりを持つかを分析することは、本研究の中心的課題である。特に、英語優位グループと日本語優位グループの間にどのような共通性と相違が見られるかを調査する。

(3) キャリア志向の特徴

上記二グループが持つキャリア志向にはどのような特徴があるか、就職活動を始める学生を調査対象とし、就職活動期間における意識の変化にも着目する。

(4) 大学における留学生受け入れの現状と問題

以上の点を踏まえ、大学における留学生受け入れに関して、「従来」型と「新型」を比較し、現状と問題点を踏まえつつ、改善策について提言する。

3. 研究の方法

本研究は、質問紙調査と対面式面接法を用いた。研究対象校は関東にある私立A大学と国立B大学の二校に設定し、前者の大学では入学及び入学後に主に英語を使用する就職活動を進める準備をしている学生を、後者の大学では逆に日本語が主要使用外国語で、就職を意識する学生を調査対象者とした。

(1) 質問紙調査

質問紙は言語使用能力と社会適応度の自己評価を中心に作った。調査員によって直接配布し、A大学17名、B大学13名から有効回答を得た。

(2) 面接調査

質問紙調査の結果を踏まえ、日本語応用能力と社会適応度を二つの軸に用い、それぞれ「高い」と「低い」評価をした計4つのグループに対して、合計7名に対して次の対面式の面接調査を行った。

a. 日本語での会話を通して日本語応用能力を確認（日本人研究者担当 約30分）、

b. 中国語での会話を通して社会適応度を確認（中国人・日本人研究者担当 約1時間）

4. 研究成果

本研究では、以下の成果が得られた。

(1) 中国人留学生の適応パターンについて

留学生の適応についての研究は、多くの蓄積がある。先行研究を参照しつつ、本研究では以下の点に留意して独自の視点を出すことにした。a. 「日本社会に^に適応する」をはかるといような一方通行的なとらえ方ではなく、留学生が能動的に環境に働きかけるといふ双方向の視点をういた。b. そうしたことから留学生が問題場面に遭遇した際に、意図的に状況に応じた戦略を選択することが発見できた。

また、適応意識と戦略の面において、多様化の傾向が全体的にみられた。日本の文化・価値観を適応の唯一の基準にはせず、中国のものと対比したり、新たに欧米の価値観を持ちこんだりして客体化する意識が働く。特に英語を得意としているEグループにはこの傾向が顕著である。

(2) 英語優位グループの現状と問題点

日本語優位(J)グループに比べ、英語(E)優位グループには多くの面において異なる特徴が見られた。

まず、Jグループでは必ずしも「日本人になる」という志向を持ってはいないが、日本的な価値観を意識した行動様式を取る傾向がある。適応意識は日本人をモデルにした同化的なものか、あるいはそれに距離を置く、いわば単線型の適応パターンになることがある。それに対して、Eグループは日本的価値観を相対化し、場面に応じて戦略を選ぶことがある。Jグループに比べ、Eグループが受けるカルチャーショックは比較的少ないが、日本人とは深く関係を築けないでいることを悩むケースも複数あった。

また、日本語の習得と使用意識においてもJグループとEグループに相違がみられた。前者は概して日本語能力が高いのにもかかわらず自己評価が低く、後者のグループは反

対に過大とも言える自己評価をしがちである。この相違は日本語に対するとらえ方に起因すると考えられる。日本語なしでは日本で生きていけないという認識をもてば、当然評価基準が高くなり、反対に他のツールを持つ後者グループは日本語を教養としてとらえる考えが働く。

(3) 要因分析

Eグループが不適応を起こす事例は、今回の調査では、見うけられなかった。日本的価値観を相対化し、状況に応じて戦略を選択的に取るということで、不適応になることは少ないのだろう。これは日本語・日本文化を適応の手段と基準にしている従来の留学生教育に対する見直しの成果と言える。特に英語による教育を積極的に導入している大学においては、価値観の一元化より多様化を重んじる背景があり、こうした適応パターンを積極的に容認する環境が存在する。

だが、大学であるからこそ存在しえた適応パターンは、他の社会単位に所属した場合には果たして持続可能だろうか。例えば、Eグループに属し、就職した留学生に対して実験的に面接を行った結果、大学生活には適応したものの、就職先の日本企業に適応するには大きな困難に抱えるようになったと述べている。

現時点の成果を踏まえ、留学生を取り巻く環境的要因を加味しながら、大学を離れて就職した際に、日本社会にどのように適応を図っていくかを、追跡調査していくことが本研究の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 中村みどり 「中国人日本留学の多様化—
—早稲田大学ダブルディグリー第一期生、
第二期生の日本体験と進路」『日中双方の
留学生における異文化適応に関する通時
的研究』課題番号 17520402 研究成果報
告書 1 2010 P1-P9
- ② 中村みどり 「中国人留学生に関する調査
データ」『日中双方の留学生における異文
化適応に関する通時研究』課題番号
17520402 研究成果報告書 1 2010
P11-P43
- ③ 楊 立明 「「留学第二世代」の異文化適
応」『日中双方の留学生における異文化
適応に関する通時研究』 課題番号
17520402
研究成果報告書 1 2010 P45-P57

[学会発表] (計4件)

- ① 池上摩希子 「留学生と日本語教育」
国際シンポジウム「中日留学の新展開をめざ
して」 20110303 中国湖南大学教育学院報告
庁
- ② 周飛帆 「留学と異文化適応」
国際シンポジウム「中日留学の新展開をめざ
して」 20110303 湖南大学国際教育学院報告
庁
- ③ 中村みどり 「稲田大学 SILS と留学生受
け入れの新理念」
国際シンポジウム「中日留学の新展開を目指
して」 20110303 湖南大学国際教育学院報告
庁
- ④ 楊立明 「変わる留学・変らぬ留学」
国際シンポジウム「中日留学の新展開を目指

して」 20110303 湖南大学国際教育学院報告
庁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

楊 立明 (YO RITSUMEI)

早稲田大学・国際教養学院・教授

研究者番号：10267354

(2) 研究分担者

中村みどり (Nakamura Midori)

早稲田大学・国際学院・助手

研究者番号：30434351

池上摩希子(早稲田大学・国際学院・教授)

研究者番号：80409721

周飛帆(千葉大学・言語教育センター・准教
授)

研究者番号：80270860